

### 2013年早稲田大学ウリ稲門会総会 開催のご案内

於: リーガロイヤルホテルホテル東京  
宴会場 ダイヤモンド  
東京都新宿区戸塚町1-104-19  
(母校大隈庭園裏)  
TEL 03-5285-1121

日時: 2013年3月9日(土曜日)  
午後4時30分 受付開始  
午後5時 総会  
午後6時 懇親会

会費: 7000円(同伴者3000円)  
学生無料

出欠のご返信をされていない方は至急  
お願いいたします。

### 年会費(5000円)・協賛金

【振込先】  
郵便振替口座  
**00170-5-37085**  
早稲田大学・ウリ稲門会

ウリ稲門会ウェブサイト▶▶<http://blog.goo.ne.jp/wasedauritoumonkai>

### 連載コラムのような編集後記

#### 「奇跡のイレブン 1966年W杯北朝鮮VSイタリアの真実」

原題:The Game of Their Lives  
製作年:2002年  
制作国:イギリス  
監督・脚本:ダニエル・ゴードン  
東北新社からDVD発売中



湘南ベルマーレを応援する筆者

ワールドカップ、私にとってこの世で最も甘美な単語です。1990年イタリア大会以降、日本でもすべての試合がBSやCS放送で中継されるようになりました。もちろんそれ以降のW杯は全試合(一大会で64試合、6大会で合計384試合)見えています。W杯がなかった昨年でも、ヨーロッパを中心に1年間で153の試合を見ました。

昨年末、曹貴裁監督と食事したときに、そんな話をしたところ、監督は「空いた口が塞がらない」という表情で私を凝視していました。李善綜先輩同様、私も筋金入りのサッカー狂。だからでしょうか、意図したわけではないのに今回の稲門会ニュースはサッカーに関する寄稿ばかりになっていました。

47年前のW杯で、アジアの名を世界に刻んだチームが

あります。1966年イングランド大会の朝鮮民主主義人民共和国代表です。共和国代表は朴斗翼のゴールでイタリアを1-0で葬り去り、アジア代表として初めて1次リーグを突破。決勝トーナメントでは、ペレと並び称された黒豹エウゼビオを擁するポルトガルと対戦し、前半25分で3-0とリードするも、終わってみれば3-5の逆転負け。凄まじい展開の末のまさしく玉砕でした。この大会のこのチームは、いまだに“ワールドカップ史上最大の衝撃”と呼ばれています。イギリス人監督ダニエル・ゴードンは、大会のほぼ35年後に、伝説のチームの選手や関係者を捜し出し、当時28歳でこのドキュメンタリー映画を作り上げました。この映画は、スポーツであるがゆえに可能であること、サッカーの素晴らしさを再認識させてくれました。

優勝してワールドカップを掲げること4度、有数のサッカー強国イタリアは、何の因果か、我が民族の南北双方にワールドカップで負けた唯一の国です。しかし、イタリアの強さを誰もが知っているからこそ、このふたつの勝利は全世界に驚きを与えました。一方で、その衝撃力ゆえに、反作用である非難も、根柢のない反発も生み出しました。ここ日本だけのことでしたが…。悲しいことです。

時は巡って、ワールドカップはまたやってきます。実は、本戦よりも面白いのは、一試合ごとにジェットコースターのごとく一喜一憂する予選の過程。韓国が属するアジアA組、これは本当に過酷です。それを思うといつも立ってはいられません。こうして、日々サッカーを思っただけの切ない気持ちになるのです。

【編集委員】朴魯善(記)



早稲田大学ウリ稲門会

〒160-0023  
東京都新宿区西新宿1-4-5  
明広ビル4階  
TEL03-3345-7618  
FAX03-3348-8746

発行人: 呉 世一(編集: 編集委員会)

### 第22号

### INDEX

1. 当代会長からのご挨拶
2. 納涼会レポート
3. 韓国校友会参加記
4. W杯の熱狂  
“韓国当世サッカー事情”
5. 湘南ベルマーレ J1昇格  
曹貴裁学兄寄稿「共に」
6. 総会案内  
編集後記

## 当代会長からのご挨拶

2013年、謹んで新春のお慶びを申し上げます。旧年中はウリ稲門会に物心両面のご支援をいただきありがとうございました。執行部を代表し、お礼を申し上げます。執行部を代表し、お礼を申し上げます。上げる次第です。

東日本大震災から、そして福島原子力発電所事故から、はや2年が過ぎようとしております。当時は、1000年から2000年に一度の天災地変は想定外のことであり、原発事故は人災ではないとの主張がまかり通っていました。宇宙の始まりから137億年、地球誕生から45億年、この歴史を考えれば、1000年や2000年は決して長いスパンではありません。また東日本大震災の規模も想定すべき地殻変動の域でありました。事故は人災である、まさに人災という視点から検証してこそ一刻も早い復興をなすことができるでしょう。本年が、被災された方々が平穏な日々を送れる年になりますよう願っております。

今年は奇しくも韓国・日本両国がともに、新しいリーダーを選出し、新体制で臨む年となりました。歴史からなにを学び、目標がどこにあるかによってその性格は自ずと明らかになるでしょう。とりわけ、韓国初の女性大統領、母を凶弾に奪われ、父も銃弾に倒れ、自身も頬を斬りつけられるテロに遭遇するという想像を絶する艱難辛苦を乗り越え、選挙に勝ち抜き大統領にまで登り詰めた彼女には、国民とともに歩むことを切に願ってやみません。同時に朝鮮半島に良き気運があらわれますように。

私たちは、ウリ同窓会、稲水会、そして統合を果たしたウリ稲門会と同窓会の歴史を刻んでまいりました。親睦をコンセプトに、多様性を認め合い、互いに信頼を構築する軌道を歩んできました。時に軌道から外れることが生じると、諸先輩・諸学兄の叡智と復元力が働き、その度に修正が行われてきました。この伝統あるウリ稲門会のタスキを次へと繋ぐことが私の大切な役目のひとつであると心に決め、頼りがいのある幹事団に支えられながら粛々と仕事をこなしてまいりました。3月9日に総会を開催いたします。いっそうのご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。まだまだ寒気きびしき折りです。お体ご自愛の上、来る総会に元気なお姿をお見せ下さい。お待ちしております。



納涼会で挨拶する呉会長

**2013年総会を3月9日に開催します。**  
詳細は最終面に。



# 納涼会レポート

2012年9月8日、新宿は明月館で納涼会を開催いたしました。

このところの夏の、暴力的ともいえる高気温を考えると、盛夏に足を運んでいただくのは忍びなく、だからといってすっかり涼しくなってからでは「納涼」する意味も無い、だから間をとって近年は9月に納涼会を開いています。ところがこの数年ときたら、9月に暑さがいくらかでも納まったためではなく、この日も記録的な残暑のまっただ中のとても暑い日でした。

今回のテーマは原点回帰。暑いなか集まって、焼肉つついて酒飲んで、語って騒いで肩組んで、同胞同窓でしか味わえない気安さにひたろう、でした。呉会長の

開会挨拶、梁直基顧問の乾杯のご発声の後、おいしい肉が焼ける音が聴こえる頃には、その音に負けじと笑い声が混じった大きな声があちこちからあがり、早々と会場はピークに達しました。

金博夫副会長の素晴らしい閉会辞（あまりにも素晴らしかったので、内容は参加者のみの特典とさせていただきます紙面に掲載はしません）をもってお開きとなるはずが、盛り上がりは納まらず、エール交換に4人が名乗りをあげる壮絶な大団円となりました。楽しいという言葉では表現しきれない「楽しい」夏の一夜でした。明月館の経営者である沈広燮顧問、ご協力ありがとうございました。



# 韓国校友会に参加して (2012年12月10日)

マイナス14℃。今年のソウルは寒かった。韓国校友会は、昨年参加していたので、今年は見送るつもりだったが、呉世一会長が参加のご都合がつかず、急遽、代理参加となった。

もともと、韓国校友会との交流は前々会長の安王錫現顧問の時代に始まった。北にも校友会があれば、交流したいところだが、現在は残念ながら北に校友会はない。

母校を卒業して、日本に在留している同胞がウリ稲門会（特別永住者=オールドカマー中心）、韓国に帰った同胞が韓国校友会となる。当日は当会だけでなく、韓国に在留している日本人の稲門会（ソウル稲門会）も招待されていた。参加者は総勢150名程度だったろうか。

当会からは、韓国にも生活拠点を持つ、金協一氏家族3名を含め、7名が参加した。

今年の総会では会長が交代され、李賢儀(이현의)氏が新会長に選出された。「韓国NYLOK」という特殊ネジを製造する会社の会長をされている。新会長挨拶では「今後は、特に若手の参加を促したい」と語られていた。いずこも、様子は似ているようだ。

将来は「北の校友会」、否、「統一祖国の校友会」との交流ができる日がくることを願わずにはおれない。  
(河相淳)



新会長の李賢儀氏(右)と筆者



# ワールドカップの熱狂 2014年ブラジル大会に向けて “韓国当世サッカー事情”

李 善 綜

遠くならず、ワールドカップの季節がやってくる。われわれサッカーファン(狂?)にとって、考えるだけで胸が熱くなってくる世界最大のスポーツイベント。そんな気持ちになるのは、2002年の「韓日共催」大会での韓国代表チームの大活躍、その記憶があまりにも強烈であったからかもしれない。あれから10年という永い年月を経た今でも、あの日々のは生き生きと蘇ってくる。

それまでの韓国といえば、アジア最強で4大会連続で予選を勝ち抜き本大会に進出、しかし肝心の本大会では1次リーグ通過は夢のまた夢、それどころかただの一勝すらできなかった稀有な国。

それが、それがである。2002年自国開催の大会では、ポーランド、ポルトガル、イタリア、スペイン等々、名だたる世界の強豪国、優勝候補たちを次々に打ち破り、アジア勢として初めてベスト4になったのだ。80年になんなんとする歴史を持つにいたり、現在では世界190余の国・地域が予選から参加し、今までに19回開催されたワールドカップ。優勝経験があるのはウルグアイ、イタリア、ドイツ、ブラジル、イングランド、アルゼンチン、フランス、スペインのたった8チーム、ベスト4に進んだ経験を持つ国・地域ですら24。それを考えれば当時の興奮・感激はむべなるかなである。誰かが言ったように、“空前絶後のことで、二度とこんなことは起こりえない”歴史的な大異変だった。これは言うまでもなく、オランダの名将フース・ヒディング監督の手腕によるところが大きい。彼は韓国サッカーを根底から変えた。彼は、一から十まで選手たちに教えた上に、大会では相手チームのすべてを分析し、それに合わせた戦術を授けたという。ヒディングマジックと呼ばれた所以だ。

さて、今回のワールドカップ、2014年ブラジル大会はどうであろうか?

本大会の前にまずアジア最終予選を突破しなければならない。来る3月26日に重要な対カタール戦(於:ソウルワールドカップ競技場)。そしてクライマックスは6月、適地に乗り込んでの4日レバノン戦を皮切りとして、11日・18日にホームでウズベキスタン・イランをそれぞれ迎え撃つ熾烈な3連戦が待っている。韓国が闘うアジア最終予選A組は、アジア最強クラスがなぜか偏って配されてしまった“死の組”。現在、勝点8の1位ウズベキスタンに続き、勝点7で韓国は2位につけてはいるが、3位のイラン、4位のカタールも

勝点は7、ワールドカップ本大会出場権を確保するのは2位までで、最終試合が終わらないうちは何とも言えないくらいの接近状態、大接戦にある。

アジア各国も2002年韓国の大躍進に刺激されてか、外国人監督を招き、産油国はオイルマネーを存分に突き込み、強化に力を入れてきた。特にカタールが如きは、202年ワールドカップ開催国に決定していることもあって、豊富なオイルマネーに物言わせ、複数の有望なアフリカ人選手たちを“終生保障つき”という圧倒的な優遇策で帰化させてまで強化を急いでいる。

しかし、残り4試合中3試合がホーム・韓国で開催されること、ここにきてヨーロッパ一流リーグに、優秀な多くの若手選手が移籍して成長していること、最も重要な3連戦がヨーロッパのリーグ戦終了直後の6月で、チームを構築しやすい時期であることなどを考えれば、アジア最終予選突破はよほどの異変さえなければ十分可能なものと思われる。



今、奇誠庸(キ ソンヨン)、具滋哲(ク ジャ Chol)、孫興民(ソン ファンミン)、朴主永(パク チュヨン)等、10指にあまる若手がイングランド、スペイン、ドイツの欧州3大リーグで活躍している。その他にも、ポルトガル、ベルギー等のチームに属し、技量を錬磨している者たちがいる。

2002年当時、本場ヨーロッパで経験を積んだ選手は皆無であった。それを考えると、当時のチームよりも現チームの方が戦力的に勝ると言える。その証拠に、23歳以下の選手で闘う昨年2012年のロンドンオリンピックで、韓国サッカーは並みいる強豪たちを打ち破り、銅メダルに輝いている。前述の若手はすべてロンドンオリンピックのメンバーであり、同時に現韓国代表の主力選手でもある。この若手選手たちがいっそう充実してチームの中心になることで、韓国代表はよりグレードアップされる。ワールドカップ本戦は2014年、経験を積み、20代中盤で体力的に全盛期を迎える選手たちで構成される韓国代表は、その本戦でこそ“かなり期待できる”というのが大方の見方である。

しかし問題がないわけではない。指導者=監督の問題である。これは監督の資質の問題なのか?よってきた理由を取って言えば、韓国病とでも言うべきか?

2010年7月、14年のブラジル大会を目指す代表チーム監督に、スペインのバルセロナ式バスサッカーを標榜する趙広来(チョ ガンネ)が就任した。滑り出しもよく、1次・2次のアジア予選に勝利を収め、最終予選進出まであと一勝に迫った3次予選のさなか、2011年12月に彼は突然解任される。大韓サッカー協会の解任理由は、3次予選でのたったひとつの敗戦、アウェイでのレバノン戦1-2を槍玉にあげ、“最終予選が心配だから”ということであった。韓国マスコミの報道によると、サッカー協会内の派閥争いがその源であるという。趙監督が勝ち進むと、2013年1月28日に行われる会長選挙に現執行部派が負けてしまう恐れがあったためと。

大韓サッカー協会は、現代財閥一族、なかんずく鄭夢準氏がこの20年間、独占して運営をほしのままにしてきた。政治と同じく、サッカーでも“主流”と“反主流”、“与党”と“野党”に色分けされ、“反主流”は冷や飯を喰わされ続けてきたというのだ。そのため、長期にわたって韓国サッカーの発展は阻害されてきたという意見もある。

現韓国代表監督 崔康熙(チェ ガンヒ)は、趙監督解任後の臨時職で、本人曰くが「アジア最終予選終了まで」という条件付き監督。その後も崔監督が何度となく「予選まで」を強調していることを思えば、本戦進出が決定すると同時に監督問題は再燃する。その後どうなるかは全く不明と言わざるをえない状況にあるのである。

そもそも代表チーム監督の任命と更迭、交代は、当該国サッカー協会の責に帰するものであるが、その選択の善し悪しは別として、そこには手続き上の公明さが求められる。規約上は技術委員会を開催して審議を経ることにしている。しかしその実、技術委員会には若い“委員”が1人いるだけなので委員会が開かれることもなく、会長と

“技術委員”の二人で決定は下され、監督本人との面談も諒解もなしに一方的に「解任」は発表された。趙監督はもちろん、コーチ陣にも残余契約期間の報酬は一銭も支払われないのだそう。趙監督は、今後の選手・スタッフたちの権利のためにも法廷で争うことを決意しているという。

その一方で、多額の不正着服事件を起こし、懲罰解雇されたサッカー協会の職員には、1億5千万ウォンの退職金が支払われている。永年勤務していたその職員は、現執行部の不正行為の諸々を熟知しており、その口封じのために大金を支払われたのだと巷間では噂されている。

この現状に危機感をつのらせたのか、与党セヌリ党の国会議員で、朴槿恵次期大統領の側近までが、1月28日のサッカー協会会長選挙に出馬した。結果は、鄭夢準氏のいとこにあたる鄭夢奎氏が、すったもんだの決選投票の末に選ばれたのだが、いまだ大韓サッカー協会は上へ下への大騒ぎの真最中…。

明るい兆しに話をええよう。黄善洪(ファン ソンホン)、崔龍洙(チェ ヨンス)、安貞桓(アン ジョンファン)等、ヒディングに薫陶を受けた選手たちが、今ではクラブチームの監督や広報の職に就いている。また、ロンドンオリンピック銅メダルチームの監督、選手時代は韓国代表史上最多の135のキャップを誇り、1990年のイタリア大会から2002年まで4大会連続でワールドカップに出場した英雄・洪明甫(ホン ミョンボ)は、本人の度重なる固辞にも関わらず、代表チーム監督の最有力候補に押されており、そのためかどうかはわからないが、現在ヒディングのもとに身を寄せ、コーチ術を学んでいる。彼らは、協会のドタバタをよそに、次世代の指導者の道を歩み始めている。

それ以上に、われわれに希望を持たせてくれるのは、次から次へと有望な若い選手が登場してくることだ。15歳以下の国際大会で大活躍し、世界最高峰のバルセロナの若年チームに所属することになり“未来のメッシ”と呼ばれている選手や、すでにそのバルセロナと5年契約を結んだ選手もいる。グラウンドと関係ないところからの邪魔さえ入らなければ、韓国サッカーの前途はますます有望であろう。

与えられた紙数も終わりに近づきつつあるので、一言だけ書いてこの稿を終わりたい。

韓国と日本、どちらが強いのか。

その答えは、ロンドンオリンピックで地元イギリスを破って勝ち上がった韓国が、銅メダルをかけた3位決定戦で、必死の日本を相手に2-0で完勝した事実で充分なのではないかと思う。FIFAランキングは、実際の強さを必ずしも反映しない。

2002年、ヒディングがまたい種が、世代をつなぎながら芽を出し、確実に大きく花開いているのだ。われわれはこのことを忘れないでおこう。“二度と起こりえない”ことはない。



# 曹貴裁学兄率いる 湘南ベルマーレ J1昇格!

2012年シーズンよりJリーグ初の在日韓国人監督として、J2湘南ベルマーレを率いてきた曹貴裁学兄、厳しいシーズンを終え、見事J1昇格を果たしました!

3月に始まったシーズンは、快調に首位で滑り出したものの当然のように激しいつばぜり合いの混沌へ。上位をキープしていたとはいえ、最後まで予断を許さない日々が続きました。残り1試合で3位だった湘南ベルマーレ、最終戦の結果次第で2位に浮上する可能性と、6位まで落ちる危険性を同時にはらんでいました。J1自動昇格は2位まで、3位から6位まではJ1昇格へ残る1席を争う明日なき熾烈なプレーオフ。まさに天国と地獄です。

11月11日夕刻、決しました。湘南ベルマーレは町田ゼルビアに敵地で3-0の快勝、2位京都パープルサンガが本拠地でヴァンフォーレ甲府に0-0で引き分け。湘南ベルマーレが大逆転で2位となり、J1昇格を決めました。11月23日にすべてを終えたプレーオフの結果は6位の大分トリニータの勝ち上がりでした。プレーオフにまわっていたら本当にどうなったかわかりません。

選手を信じ続けた曹貴裁学兄、見事でした。おめでとうございます。初采配にして3季ぶりのJ1昇格、快挙という以外に言葉がありません。

新シーズンの準備に忙しい曹貴裁学兄から寄稿いただきました。

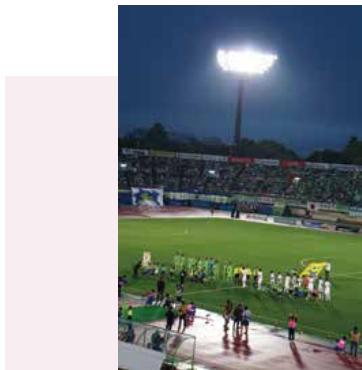
## 「共に」

湘南ベルマーレ監督 曹 貴裁

2012年、湘南ベルマーレは3年ぶりにJ1に復帰できた。指導者として子供たちを教えていた時期を合わせるとちょうど12年目、ひとまわりという年に湘南ベルマーレのトップチーム監督としてのオファーをクラブから頂き、やらなければいけないという責任感と果たして自分がこの大役を果たせるかという不安感が半々の年明けだったことを昨日のことのように思い出す。

元々トップチームの監督という指導者なら誰もが目指すであろう目標に自分はおぼろげなものしか抱いていなかったこともあり、監督初心者ของทีมに対する周りの半ば諦めに似た空気感を感じながらも、「俺が監督なら周りがそう思うのも仕方ないかもしれないな」と、どこか自分が置かれた状況を客観視していたきらいもあった。

監督というのはリーダーである故の孤独感との戦いとも



言える。それはユース年代の監督をしていた時期にさえひしひしと感じていたもので、トップチームなら尚更であろうことは想像に易かった。孤独とは自分との戦い。すべて自分に跳ね返ってくるだけに、神経をより研ぎ澄まし、これからやるべきプロセスに磨きをかける。元々1人で何かをすることがあんまり好きではない自分にとっては非常に高いハードルではあるが、同時に達成した時の喜びは何事にも代え難い。現役時代にゴールを決めた時の高揚感とは一味違う充実感のようなものが体全体に満ち溢れる、そんな職業だと思っている。

開幕から選手の頑張りで9戦負けなし、首位にいたその時期も常にこのままでいくわけではない、これでいいわけがないという不安があった。1年間で大きな山は必ず来る。その時にこそしっかり選手にプレない自分を示し、高い山の頂上に向かい、なるべく先頭から最終列までがコンパクトに一体感を持ったグループでいさせる。この事に1年間ほぼ没頭してきたと言えるかもしれない。監督が孤独であるのと同時に、プロサッカー選手はその報酬と、安定からかけ離れた立場のミスマッチから基本的に不安を抱えている。全員が試合で活躍したいと思っているが、頑張っても試合に出してもらえない選手がチームのうち半分を占める。見返りを求めるには、実のところ割に合わない職業だと思う。自分が監督を引き受けた理由は実はそこにあった。「この選手たちを成長させたい。」と同時に共に成長していけるようなチームの空気を作りたい。」ワールドワイドなスポーツであるサッカーの、有数の優秀な指導者にもこの気持ちだけは負けないだろう、そんな自負がある。9戦負けなしが途切れ、2連敗したもののなんとか踏ん張り、後の8戦負けなしにつなげることができたのも、実際にその自負が自分を奮い立たせたからだろう。

とはいえ、終盤にきての3連敗など、調子の波が交互に入れ替わる1年ではあった。そんな1年の中で、不思議と当初に抱いた「基本的概念選手と共に歩んでいく」という気持ちは、シーズン当初より終盤にかけての方が強くなっ

ていた。チャレンジしたミスは絶対に怒らなかった。結果論で選手たちにコメントすることだけはやめようと心に誓っていた。その代わり、試合に出られないからといってチームを忘れていた選手は、大人であつてもきつく叱責した。本当に我々の選手たちは謙虚に自分の後ろにチームがいるという事を忘れずにどの試合も戦い続けてくれた。そして、最終戦の奇跡を生むことができた。監督として彼らを心から誇りに思っている。

2013シーズンに挑むにあたってこの気持ちだけは変えるつもりはない。いや変えてはいけないと思っている。「共に」これは監督として、人としての自分のキーワードだ。在日韓国人として、この日本の中で生きていくためにも必要な精神だと思っている。結果の責任は自分が取る、プロセスには徹底的にこだわる。この姿勢をさらに磨いて新シーズンに臨もうと思っている。

我々の試合を見た人にエネルギーを与えていけるように。そして関わる人全員が生きている実感を感じられるように。今年も自分らしく監督業を楽しんでいきたい。開幕は3月2日。同じ神奈川の横浜マリノスだ。クラブ規模は今のところ叶わないかもしれないが、湘南スタイルだけはスタジアムで存分に発揮していきたい。そしてシーズン通して選手たちを信じ、最後まで諦めないパワフルでアグレッシブなサッカーを皆さんにお見せしたいと思っている。

この快挙を祝賀し、曹貴裁学兄と湘南ベルマーレを応援したい、支援したいという学兄からの声を多数いただきました。その通りと思われる学兄は同封いたしました別紙をご覧ください。「ウリ稲門会有志」で取り組む予定です。

